

学習形態 新型コロナウイルス非常事態のためネット上で講義。自学。

テーマ 『教行信証』とは何か。

— 『教行信証』撰述の意図 —

『証卷』について

○第4回の学習会で行と証の関係において

「第一に「行」とは何か。通仏教でいわれる修行的概念と同等なのであろうか。同等であるならば、行とは、「教」が示す内容を実践していき「証」を得るという行程パターンを意味してくる。

それならば、文頭に「真実行を顕わさば」と述べるべきであろう。にも拘わらず、先に戻って「往相回向を案ずる」と述べてくるのは、どういう意味になるのであろう。」という発題から『行卷』を述べてきた。しかるに『証卷』に来ると「還相回向」が述べられてくる。ここから鑑みるに、この「教行信証」というのは通仏教の教信行証という修行の行程とみるよりも、往相から還相への転回と考えた方が的確ではないかと思われるのである。

○今回は、この「往相から還相への転回」という事を基礎としながら考えていきたい。

課題17 『証卷』は結論（到達点）か？

○「証」を原語的に遡れば、仏教の基本形態である「覚り・正覚」である。しかし初転法輪の話にもあるように、釈迦が「俺は覚った」といっても覚りを知らないものにとってはわからないわけです。それが仏教の歩みの中から「覚証」が求められるようになってくる。

しかれば、それがどこで明らかになるのか。やがて「覚」とは自覚・覚他であるという考えとともに大乘菩薩道が発展してくる。そういう流れとともに、「覚」とは「如実知見」という認識論へと移行していく。（これは虚妄分別・無分別智等の課題となっていく）

仏教の漢訳において、「証」と訳されている原語は多少の意味の相違があってもかなりの数になっているといわれている。

その原語の意味を探ってみれば、①「目の前に正しく置く・よく観察する・明らかにする」→如実知見 ②「到着する」③「到達する・完成する」などの意味の原語が「証」と漢訳されている。

参考 『十地経』について

○今『十地経』を論じることはできないが、必要部分を取り上げて『教行信証』との関連に触れていきたい。これは言うまでもなく菩薩の十地の事である。

○初地「歡喜地」について

発心を起こす。信を得る。・・・『行巻』 p 162～164

- 二地「離垢地」
- 三地「明地」
- 四地「焰地」
- 五地「難勝地」
- 六地「現前地」

ここにおいて六波羅蜜が完成する。即ち「三界虚妄 但是一心作 十二縁分是皆依心」という唯心の境地に到達する。これは空の境地であり根本無分別智である。即ち涅槃を意味する。

- 七地「遠行地」

この地まで来ると、すべて行ずることは行じ終わり、上に求める菩提もなく下に救うべき衆生もない、全く成すことはなくなった地である。しかしここが終着地点ではない。この悟りの境地に到りこの先何をすればいいのか。このことを“七地沈空の難”と呼ばれている。(聖典 p 286 参照) 難とは、空を覚って何もすることがなくなってしまったので“菩薩の死”とも言われている。(あるいは墮二乗地ともいわれている。)・・・『証巻』の文頭の言葉「極果」。無上涅槃に行き着く。

これからどうするのか。この“難”をどのように超えるか。

- 八地「不動地」(あるいは不退転地とも呼ばれる)

七地の“難”を超えるには「如来の加勸による」といわれている。この八地にのいて如来が出現するわけです。そして如来の本願に出あってようやく七地を抜け出すことができるのである。この願のことを「般若の覚証の、やむを得ざる大悲としての展開」(あるいは空亦復空とも)言われている。これは、大乘菩薩道の授記に当たるのである。[→授記思想を参考]

- 九地「善慧地」
- 十地「法雲地」

さて、『教行信証』と「十地」を重ねてみると、

『行巻』・・・初地〔歓喜地〕

『信巻』・・・

『証巻』・・・七地 無上涅槃という到達点。覺りに沈む。

・・・「二つに還相回向というは、すなわちこれ利他教化地の益なり」とあります。この時の「地」とは八地の事でしょう。これは実に「しかれば弥陀如来は・・・種々の身を示し現したもうなり」(p 280) という如来の授記によって八地に進むことができるわけです。

ここでもう一度「大乘菩薩道」の思想に戻ってみますと、初地から七地までの菩薩を「未証淨心の菩薩」八地已上の菩薩を「淨心の菩薩」と言い、菩薩を二段階に分けている

(p 285)

そして天親菩薩は「入門」と「出門」の二門で表現し、曇鸞大師は「往相」と「還相」の二相で表現されてくる。これは上記の八地を境に振り分けられる菩薩の姿に重なってくるのである。

『真仏土巻』・・・八地 如来授記の内容。

『化身土(上下)巻』・・・九地・十地 これは八地已上の菩薩の形相を示しているのではないか。

このようにしてみると、『教行信証』というのは大乘菩薩道を示しているのではないか。そして、浄土真宗というのはまさに大乘菩薩道であり大乘仏教の至極であることを示そうとしているのであろう。

課題18 「正定聚」とは

課題19 『証巻』(還相回向)の意味とその着眼ポイント

- ① p 287 「それ非常の言は常人の耳に入らず。これをしからずと謂えり。またそれ宜しかるべきなり。」
- ② p 290 「清浄句とは、いわく真実の智慧無為法身なり。」
- ③ p 295 「もし智慧と方便とに依らずは、菩薩の法則、成就せざることをしるべし。」
- ④ p 296 「教化地はすなわちこれ菩薩の自娯樂の地なり。」
- ⑤ p 297 「煩惱の林の中に回入して、神通に遊戯し、教化地に至る。」
- ⑥ p 298 「利他の正意」

課題20 「他利利他の深義」とは？

「他利利他」ということが何故『証巻』の結びに出てくるのか？